

王羲之 力蓄

大日本 有再之佛 容

王統社 沈

總行部員五圖五指錢

總行員五圖五指錢

配元
東京市神田區御茶水町二丁目十九番地

日本出版配給社販賣社

新嘉坡第一大五十五一
新嘉坡第一大五十四一
新嘉坡第一大五十四一
新嘉坡第一大五十五一

株式會社通銷社

發行所

東京市神田區御茶水町二丁目十九番地

定鑑

印贈者
東京市芝區片町三丁目八番地

發行所

保證
新嘉坡

東京市芝區片町三丁目十九番地

發行所

力

著者

東京市芝區片町三丁目十九番地

大日本古典之傳習

昭和十一年十月二十五日發行

出文廣承認書號(支100446號)



序

一、簡単にありのまゝを記して、序とする。

一、本書は友人伊福部隆彦君の勧めにより、大正十三四年頃から、舊稿で、まだ纏めずにおいたものを取集めたものである。而して新しい大東亞戦に何等かの關聯をもつものにして、そこに職域奉公の微志をあらはしたいと思ひつゝ、その心組で、纂輯をも試み、またおふけなき名稱をも撰んだのであつた。

燐軒懋異の計を躊躇」されぬ筆致である。

一、集めたる拙文十五篇、その執筆の機縁はまちくで、或は新聞の讀切物として寄稿したものもあつた。或は國文學研究の諸雑誌に掲載したものもあつた。或は中學程度の講義錄に連載したものもあつた。或は名著現代語譯の解題として書いたものもあつた。殊に大甘で甚だ相應はしからぬのは、拙纂國語讀本の教師用に載せたもので、その老婆心切の低級さは我れながら極りのわるい心地がするけれども、こんな

ものもたまにはと考へて、思ひ切つて載せることにした。さするかげども、うるる
おじや。終り大甘す甚き眞懶かゝやせぬのれ、眞繁圓語讀本の邊取用の筆せざるもの
一、古典の意義と趣味とは廣大無邊である。而して我が古典の廣大無邊なる意義趣味は
國運の開展するにつれて、常に思ひ設けぬ様相を示顯するやうに見える。本書は著
者があが我が古典の時々見せた新しい様相に打たれて、幾度か首を垂れ掌を合はせた
歎稱歎異の情を披瀝した幼い記録である。

きよ知る。お次なるむぢよち答歸きよ對ふるのうもじや。

よ昭和十七年八月一日奉公の端志さるされつゝ思ひじく、この著時者、裏跡
りほん大もの著真業め大ものうある。而して豫じて大東亞傳づ同華心の關極きよじ
一、本書は丈人母語語讀本の標みしよし、大正十三年更々、舊譯す、お次懶めぞ

一、簡單づるものまゝを語つて、現わせる。

大日本古典の偉容 目次

第十一 祝詞祈年祭の高遠なる意義	二二三
第十四 貞喜一古典に於ける皇道弘布の宣言	二四三
第十二 神功皇后の三韓遠征（日本紀）	二四九
—布哇馬來の電撃を思はしむる—	
第十三 和泉式部日記の本文意義趣味考	二五九
第四 問答物語の始祖大鏡	二七
第十五 王朝文學に於ける見残されたる表現美	二七
第六 鎌倉の軍記に於ける新しき文體の創始及び完成	二八
第七 太平記再讀重愛の心緒を述ぶ	二九
第八 謠曲 閨田川	三一
第九 謠曲 その本文、解釋及び批評	三一

第九 謠曲「羽衣」文：演説又心批評……………二七七

第八 謠曲——その本文、解釋及び批評……………二三一

第十 「羽衣」によりて試みに謠曲に於ける「カムル」の意義……………二三一

第十一 役目及び趣味を説く……………二五五

第十二 松島より平泉へ（松尾芭蕉、奥の細道）……………三五九

第十三 問答——その本文、解釋及び批評……………三九五

第十四 幻住庵の記（松尾芭蕉）……………三九五

——その本文、解釋及び批評——

第十五 老の姿はかはるとも（近松、國姓爺合戦）……………四四五

第十六 真書太閤記とは何ぞ（近松の真書）……………四八三

第十七 椿説弓張月を讀む……………五一五

ます。是の箇中窮間とよべる連風の壁を立てて、サムラムの小屋が奥より延び来て、越後
塗土の御殿の背の前を詠め置みて昔の財木の財を想ふて置まつて、風の外ぬきと床ゆみのよ
干したての御室を置くが、もと斯かはつての御室である、牆面一列の御間とよべる壁を等々へ
頬せし、壁のじくに點け、青空高く晴れむ、白雲取大壯のゆゑに點ける點け、塗土の御殿
輪の申土の間の中、大書のテモ本文字である。「大輪の良きおおを四さの國々お、天の蓬
「神幸祭」お輪々の手縫の豐穣を傳る語あるが、その中で「御限」も云ひた、新つ天照大
らある。

第一 祝詞祈年祭の高遠なる意義

あるべくお白衣の専門の歌の中である。お大人の言おぬきと重大な思ひを露せ出づる書ひと原
山の藤井處の書への文。古典に於ける皇道弘布の宣言——ある事も書ひと見れる。同書
述到ちゆる、王實樂土の平夷の目挙げ日掛つ賣やじと書ひと見る大書外の手縛を讀む其の大書
時との和牛の大非常物である。障紙もと織物の支那全土へ、今度の皇室の大書——御書

何しろ昨今の大非常時である。朝鮮から満洲から支那全土へと、仁義の皇化が次ぎ／＼に推し及ぼされて、王道樂土が年毎に月毎に日毎に廣がつて行くといふ大時代の年頭を飾る我が大學新聞の新年號に書くのだ。同じ事なら、此の目前の大事件に關係のある事を書いて見たい。同時に成るべくは自分の専門の畠の中から、まだ人の言はぬやうな重大な思想を擇り出して書いて見たいなどと、負ふけない事を考へて居る中に、ふと浮かんだのは、古い祝詞の「祈年祭」の一節である。

「祈年祭」は神々に年穀の豊熟を祈る詞であるが、その中に「辭別」と云つて、特に天照大御神に申上げる詞の中に、次ぎのやうな文句がある。「大神の見そなはす四方の國々は、天の蔽ふ限り、地のつゞく限り、青空あそぞらが高く棚引き、白雲しらもが大地だいちにかぶさつて居る限り、海上では棹櫓さなづらを干さずに漕ぎ進んで、もう進めぬといふ行き止まりまで、海面うみ一ぱいに隙間もなく船を浮かべ、陸上では馬の背の荷を結むすひ堅めて岩が根木の根を踏みくぼまして、馬の爪がもう利かぬといふ處まで、長い道中隙間もなく駄馬の列を立てつゞけて、せゝこましい小國は廣々と取り廣げ、險岨

な物騒な國々をば平和安穩の國となし、而して王化に潤はぬ遠國をば、幾十筋の太い綱を打ちかけて引き寄せるやうに御寄せ下さる。これ皆大神様のお蔭であります」といふ一節がある。或る私はこれを讀んで、そぞろに皇軍百萬海を渡つて、揚子江、黃河、太湖、八達嶺、居庸關、無數のトーチカ、クリークを跋み躍り飛び越えて進み行く、陸、海、空三軍の、大理想を念じつゝ慘として驕らざる雄姿を思ひ浮かべる。同時に吾々の祖先が、千幾百年前において、今日吾々のやつゝある事、やらうと努めつゝある事を、文字の上では、より偉大に、より壯烈に宣言して居るのを驚歎するのであるが、こゝに一つの不審は、この海、陸、船、馬に關する數行の意義をば、朝貢の船舶駄馬の連續する事と取るべきか、或は皇化を普及し、民禍を芟除し、理想を弘布する、我が宣傳使の海陸兩路における大行列と見るべきかといふ點である。その要點なる原文を読み下し式に書き改めると、

青海原は棹舵干さず、舟の艦の至り留まる極み。大海に船満てつづけて、陸より往く道は、荷の緒結ひ堅めて磐根木根履みさくみて、馬の爪の至り留まる限り長道間なく立てつづけて、狹き國は廣く、峻しき國は平げく、遠き國は八十綱うち掛けて引き寄することの如く、皇大御神の寄さしまつり給へば……

右の通りである。

古の紙ひづある。

二

表き國其八十聯でさ旨せしに書するるの歌は、皇大神神の書ち」まひり等へ對……
此の一節の意義について、從來は賀茂真淵が「祝詞考」において「青海原云々、これは海路よ
り貢奉るをいふ」自陸往道者云々、これは陸路より租調等を貢奉る體を云ふ」と解釋したのを始
めとして、中頃の鈴木重胤から最近大正昭和の國史國文の諸家に至るまで、悉くこの意味に取つ
て居るが、又私自身も以前はその意味に取つてゐて、已に一度その通り小著にも書いたのである
が、ひそかに思ふに、これは朝貢の船や馬が遠近の領國から來ることではなくして、皇化宣傳の
御使が勢揃ひして出かけて行くことであらう。向うから來るのではなくして此方から往くのであ
ればこそ、「舟の艤の至り留まる極み」、「馬の爪の至り留まる限り」とは云つたのであらう。「陸
より來る道」と云はずして「陸より往く道」とは云つたのであらう。また船を満てつけ馬を立
てつゝけて、狭き國を廣くし、峻しき國を平かにすると言ひつゝくる以上は、どうしても一種の
理想を持つ團體の積極的遠征を意味すべき筈で、小弱國がお辭儀をして強大國の主權者に獻ぐる
朝貢の船や馬に取つて、狭き國を廣くし、峻しき國を平らげくするといふのは、何の意義をも成さ
ぬことである。かたゞ、これはどうしても皇化宣傳使が、仁義平和の大道を高く掲げて、有形の

には、狹き國、險阻な國を廣く平坦にし、精神的には惡政惡俗に苦しむ國々を善導して、道ある再國とするといふ意味に取るべきであらう、と私は思ふのである。

翻訳のかやうな事は、一見文法や古文辭に囚はれた好家の暇つぶしのやうにも見えるが、しかし考へ様によつては、古文を正しく解釋するのは、非常に大切な仕事で、殊に肇國當初に國民の大理想の宣せられた偉大なる文章の意味を、左と解くべきか、右と釋くべきか、消極的に解釋すべきか、積極的に解釋すべきか、坐つてゐてお土産みやげを貰ふ事と取るべきか、難路を切り開きつゝ、進る中で尊い贈物を憐れな人々に與へる事と取るべきかは、國文學に遊ぶ小さき學徒としてのみならぬ者も、日本國民としても輕視し小視すべき事ではあるまいと思ふ。詳實くわいなる事ことがござりまするよ。

さよ歸かへる大「赤案」^{しょあん}の摺版、全圖の數千、數萬、和わか十種萬枚の輸入の攝影頭讀くち付
附つきる大駁駁衣、留りゆ味の裏うら升立式の詠賞よめいのうである。あの走人しゆじんや天賦問議てんふもんぎの大文章
壽平味私は如上じょじょうの所見を十餘年前（大正十三年）に取纏とりまつめて、小さい論文を書いたことがある。その小
説篇を陸軍幼年學校が友人本庄主一君を介して、その教科書に採錄することを所望され、私は欣諾
與うけし、これが始めて同校の讀本に掲げられたこととなつたが、當時私はこれを悦ぶと同時に、一種
國体の奇異なる感じのするのを禁ずることが出來なかつた。その中に上海事變が起つて、新に滿洲

國が成立した。私はこれを見て、千數百年前に創作された「祈年祭」の辭別ことわざの尊い暗示が、昭和の國民を奮ひ起たしめたのではないかと疑つた。その中に今度は、支那事變が突發して、皇化宣傳の使命を帶びた勇士達が、現に海川を渡り、野山を踏みしだき、大空をとよもして、北支、南支、中支に仁義平和の道を布き傳へつゝある。私はこれを見て、肇國の太古に種を蒔かれて、祝詞のりとの一節に文學の花と咲いた大理想が、昭和の現代に立派に結實したのである。あの或人々からは天地間第一の大文章とも稱せられた「祈年祭」の辭別が、全國の幾千、幾萬、時としては十餘萬柱の神々の社で朗誦される中に、冥々の間に國民の心を感孚して、この吾等が眼前の大結果を結實させる事とはなつたのであると信ずるやうになつた。抑もあの大祝詞は、何により、誰れが思ひつき、誰れが筆を執つて、あの莊嚴雄大なる詞章を成したのであらうか。これは今日から測り知るべからざる事であるが、ちとにかく太古にあの大可能を暗示して後昆を激勵した大文學があり、最近吾等の時代において、祝詞の古文が誇張された空想妄想でなかつた事を證明した生々いきいきしい事實があり、古今相照らして皇國日本の偉大を證明して居るのは、實に愉快なることである。

再び言ふ

天の蔽ふ限り、地のつゞく限り、海では棹櫂さざわらの利く限り、海上一ぱいに船を浮べ、陸では馬の爪の利く限あら。

り、長い道中隙間もなく駄馬の列をひき連ねて、皇化の宣傳使を差立てゝ、狭き國々を廣くし、險しい物騒な國々を平和安樂にして、仁義の皇道に潤はしめ得ることは、伊勢にまします大神様のお蔭でありまする。

などは、天壤無窮の神勅に次いで、吾々の合掌しつゝ、歡喜踊躍して、その實現大成に努力すべき事ではなへか。（昭和十三年一月六日稿）

の電撃うち一ひと合戦せ大歎むらうるひを、おおきに勝利した文書うち、軒やつて、舊古より軒
か、頬圍き廻りし大歎が、さうへお近支の素古舞舞は太閤の大即位式も、今更のハヤハ、ハコ
ハ、其御本小ちわゆる、輪明の時舞うよし、天歎自然の歎亡うよし、香取一姫の歎亡うよし、
伏せる軒長皇吉の舞羅升分の時事うよし。今が無歸今更の太平舞舞うせん、非常の歎滅の歎
じて來え。おのる事へ直つて、ハルヘテ隣へて見よ詠歌、つぶつとと思ひ大のゆ、『日本紀』の
舞の貢舞を夫じたすそで舞せよ、費じて此の舞舞の景發を補るつむ跡歎が「へる」の字を原歌
もひらきじゆく、此の意ちる舞の舞面透つて翁引舞へる、重慶延和の草創日本舞争舞が、
第二 布哇馬來の電撃を思はしめる
手の十日ひ、あの神功皇后の三韓征伐(日本紀)電の始舞うるふか。也
適當の文章の無ひのう因じて居て中々、突然今更の大東亞舞争舞發つ、昭和十六年十二月八日
ひづつともう春へる。かつて其の華開れつて、うのす面のまもる遺韻をあるじて見ゆる、
遂お景致う出来の文章、國へ到着升文士の筆うれじお文殊事變の一韻を歌ひ、此の舞舞の詩

私は最近に出来た文章、例へば現代文士の筆に成つた支那事變の一節を掲げて、此の講義の結びにしようと考へてゐた。そして其の準備として、その方面のおもなる數篇をあさつて見たが、適當な文章の無いのに困つて居る中に、突然今度の大東亞戰爭が勃發し、昭和十六年十二月八日及び十日の、あのハワイの真珠灣及びマレー沖の米英軍に對する初一擊の快報に驚かされた。わかれらの驚きは大きかつた。同時にわれらの喜びは限りなき安心と希望とに満たされた廣大無邊なものであつたが、此の驚きと喜びとに面接した後に考へると、重慶政府の軍隊相手の戰爭記は、俄に貫祿を失つたやうに感ぜられ、從つて此の講義の最後を飾るには相應はしくないやうな氣をして來た。そこで考へ直して、いろいろ調べて見た結果、これこそと思つたのが、『日本紀』に於ける神功皇后の新羅征伐の記事である。それは無論今度の太平洋戦に比べて、非常に地域が狭く、仕掛が小さいけれども、神明の加護により、天地自然の協力により、君臣一致の努力によつて、敵國を威壓した趣は、たとへば弘安の蒙古撃攘と太閤の大明征伐と、今度のハワイ、マレーの電撃とを一つに合はせた様なところがあり、之れを記述した文章にも、神々しい、蒼古とも神